ドラゴン・バスタード　その４

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドラゴン・バスタード　その４

【Ｎコード】
Ｎ２６４２Ｏ

【作者名】
青木弘樹

【あらすじ】
レイとグレンドは、ついに暗黒竜二世討伐に向かった。しかしその途中、ある魔物が行く手を遮った。グレンドと魔物が対峙する中、不吉な予感が、飛鳥の持つ水晶玉に表れるが…。

作：青木弘樹

（前回の続きです）

両者、にらみあいが続いていた。レイはこぶしを握り締め、見ていた。

「いくぞ！」

コーネルトが襲い掛かってきた。

「むん！」

”ガキン！”

槍で攻撃を受け止め、グレンドは後ろへ跳んだ。

「ふむ。そちらが二刀流なら、こちらもそうしよう」

そう言うと、グレンドは槍を二つに折った。どうやら折れるように加工していたみたいだ。そして刃の付いていないほうに刃を取り付けた。

「や、槍の二刀流？」

レイは驚いた。ただし新しく取り付けた刃は鉄製だ。もう一方、つまりポセイドンの槍に元々付いているのはダイヤモンド製だ。

「ぐふふ…おもしろい」

コーネルトは微笑した。

「さあこい！」

グレンドが言った。

「がああ！」

二つの刃がグレンドに襲いかかる。

「ふん！」

グレンドは二つの槍を、その二つの刃に突き刺した。

”ビシ…バリン！”

鉄の刃のほうは砕け散った。だが…
”ビシ…バリン！”
ダイヤモンドの刃のほうは、魔物の刃を砕いた。
「くっ！」
魔物は少し退いた。
「これで…1対1だな」
グレンドが言った。
「そうかな？」
次の瞬間、魔物の角がムチのように伸び、とがった先端がグレンドの足に突き刺さった。
「ぐわっ！」
「グレンドさん！」
「ふふふ…そりゃ！」
またも角が襲い掛かってきた。素早くトリッキーな動きに、グレンドは反撃できなかった。
「くそっ！」
グレンドは短剣を放り投げた。が、
”ガキン！”
魔物は簡単に刃（手）でそれを弾いた。
「ふふふ…」
魔物は楽しそうだった。
「はあはあ…」
グレンドは苦戦していた。
「そりゃ！」
またも角が襲いかかる。
”ズバア！”
「ぐわっ！」
今度は角が肩をかすった。
「う…くく…」
グレンドは、様子がおかしかった。

「グレンドさん！」
心配そうに見るレイ。
「う…」
グレンドは片ひざをついた。
「ま、まさか…？」
「ふふふ…気づいたか？そろそろ毒がまわってきたようだな」
「なんだって！？」
レイは驚いた。
「く…」
グレンドは立ち上がれなかった。
「くそう！」
レイはグレンドを助けようとした。
「来るな！」
「グレンドさん！」
「こいつは…必ず俺がしとめる！」
グレンドはまっすぐに魔物を見ていた。
「グレンドさん…」
「ふふふ…お前はもう終わりだ。次は心の臓を突き刺してやるわ」
魔物はじっとグレンドを見ていた。
「死ね！」
不気味な触手のように、角がグレンドめがけて向かってきた。
「うおおお！」
グレンドも前に出た。
「グレンドさん！」
「ふん！」
グレンドは神業とも言える動きで角を掴んだ！
「なにい！？」
そしてそのまま突き進み、槍を魔物の心臓めがけて突き出した。
「くっ！」
”ギン！”

魔物は刃でそれを食い止めた。が、
”ビシ…バリン！”
刃は砕け散った。そして、
”グサア！”
槍は魔物の心臓をつらぬいた！
「ぐわあああ！」
”ドーン！”
魔物は倒れこんだ。
「はあはあ…」
”バタッ”
グレンドも倒れた。
「グレンドさん！」
レイは走ってグレンドに近寄った。
「グレンドさん！しっかり！」
グレンドは口から血を流していた。
「レ、レイ…」
「グレンドさん！」
「あとは…頼んだぞ…」
「グレンドさん！」
「お前ならできる。暗黒竜を…」
「グレンドさん！」
レイはグレンドの手を強く握っていた。
「さら…ばだ…」
グレンドは息絶えた。
「グレンドさん！グレンドさーん！」
レイは涙を流した。
「やはり…間に合いませんでしたか…」
そこに突然、飛鳥が現れた。
「君は？」
「私は…飛鳥です。魔術師の飛鳥」

「君が…」
「不吉な前兆が…当たってしまいましたね…」

数十分後。
グレンドの遺体を土に埋めたあと、二人は少し休んでいた。
「申し訳ありません、レイ様。グレンド様に初めて会った時、少し不吉な影があったのですが、私には言えませんでした」
「君のせいじゃないさ飛鳥。グレンドさんは誇りを持って戦った。そして誇りを持ったまま天に召されたんだ。後悔はないはずさ」
「…」
「よし。行こう。サザンの町にはカイルさんが待っている。急がなきゃ」
「はい」
「馬は乗れるかい？」
「はい。大丈夫です」
レイと飛鳥は、サザンの町に向かった。

サザンの町。
「ついたね」
「はい」
「カイルさんには手紙を出していたから、今日来るって分かってるはずだけど」
レイは、カイルとは何度か手紙でやりとりしていた。しかしはっきりした住所は知らなかった。
「…」
飛鳥はある家を見ていた。派手な色合いの家だ。
「レイ様…あの家。カイル様はあそこにいるはずです」
「ん？」
見ると、派手な色の家が目に入った。
「ははは、カイルさんらしいや」

レイは久しぶりの対面にうれしそうだった。ただ、グレンドのことがあるので、笑っている場合ではなかった。
「よし、行ってみよう」
「はい」
「それとさ…」
「なんでしょう？」
「レイ”様”っていうのは、やめてよ」
「？」
「俺なんて、そんな言われ方される人間じゃないし、なんか調子狂うよ」
「しかし…」
「飛鳥はいくつなんだい？たぶん俺と同じくらいだろ？」
「１８です」
「ほら、いっしょじゃない。ね」
「しかし…」
「いいから、呼び捨てで頼むよ。カイルさんにも”様”はいらないよ。ね」
「分かりました」
「よし。じゃあ行こう」
二人はその派手な家に向かった。

”コンコン”
レイはドアをノックした。
”ガチャ”
「おお、レイ！久しぶりだな。待ってたぜ」
カイルが出てきた。カイルは髭を生やしていた。服装は特に派手ではなかった。
「久しぶりです。元気でしたか？」
「まあな」
「お久しぶりです。カイルさん」

「おお！飛鳥ちゃん。久しぶり」
相変わらず気さくなカイル。しかしレイはそんな気さくなカイルが気に入っていた。
「あれ？グレンドさんは？」
「カイルさん。詳しいことは中で話すよ。馬を置いておける場所あるかな？」
「おお。そこの倉につないでおくといい」
「ありがとう」
レイと飛鳥は、カイルの家に入った。そして、グレンドのことを伝えた。
「そうか…そんなことが…」
カイルも残念そうだった。
「けどグレンドさんは、とても立派だったよ」
「そうだな。俺はその戦いを見てないけど、きっとそうだったと思うよ」
「…」
飛鳥は黙っていた。
「よし。今日はまあ、ゆっくりしていけよ。船はちゃんと用意してある。任せとけって」
「ありがとう。そうさせてもらうよ」
「飛鳥ちゃんもな」
「ありがとうございます」
「二人とも、腹減ったろ？俺が何か作ってやるよ」
「カイルさん、料理できるんですか？」
「当ったり前よ！そのうち料理屋でもしようと思ってるくらいさ」
「へえ」
「ちょっと待っててくれ」
「分かりました」
３０分ほどして、料理が運ばれてきた。
「うわあ、美味しそうだ」

「だろ？へへへ、さあさあ食ってくれ。どんどん食ってくれ」
「いただきます」
レイと飛鳥は、カイルの手作りの料理を美味しくいただいた。
「ふう。ごちそうさまでした」
レイと飛鳥は、満足そうだった
「美味しかったなあ。ねえ、飛鳥」
「そうですね」
「ふっふっふ」
カイルは自慢げだった。
「レイ、今の俺があるのはお前らのおかげだ」
「俺は何もしてないさ、カイルさん」
「いや…とにかく俺も出来る限りのことはしたい。だからブラック大陸までは俺も一緒に行くよ」
「え？」
「船の操縦も覚えたんだ。俺がお前らを運んでやるよ」
「カイルさん、でも…危険だよ」
「分かってる。でも、自分でも分からないんだけどよ、俺も行かなきゃって…そう思うんだ」
カイルは真剣な表情だった。
「分かった。ありがとうカイルさん」
「感謝します。カイルさん」
「レイ…絶対に、暗黒竜を倒せよ」
「…はい！」
三人は決意も新たに握手を交わした。明日が決戦の日だ。

翌日。
三人はカイルの所有している船を停めている場所に行った。
「さあ、これだ」
それは十人程度が乗れる船だった。船は高価だ。そんなに大きい船はカイルには買えなかった。

「まあ、ブラック大陸はそんなに遠くないから、これでも大丈夫さ。今日は海も穏やかだしな」
「そうですね」
「よし。じゃあ行こう」
いよいよ出発だ。目指すはブラック大陸。目指すは暗黒竜二世。
「そういやレイ、ネオハルコンの剣、見せてくれよ」
「いいですよ」
レイは剣をカイルに渡した。
「ほお…見事だな。オリハルコンの剣もすごい剣だったが、こっちのほうが軽いな」
「はい。けど威力はすさまじいですよ。一度その切れ味を見るために、鋼鉄製の金庫を切ってみたんです。そしたら真っ二つに切れました。いとも簡単に」
「そいつはすげえな」
「これなら…きっと暗黒竜を倒せるはずです」
「そうだな。しかし油断はするなよ。相手は魔物だからな」
「はい」
一時間ほどして、ブラック大陸が見えてきた。
「あれだな…」
不気味な雰囲気だった。あるいは魔物が住む大陸だからそう感じるだけなのか。
「静かですね」
飛鳥が言った。
「よし、船が入れるような海岸線を探そう」
カイルは舵をきった。そして海岸線を見つけ、そこに近づいた。
「よし」
海岸線にたどり着いた。数キロ先に城が見える。あそこに暗黒竜二世はいるのだろうか。
「じゃあ、俺はここでお前らを待ってる。必ず帰ってこいよ」
「はい」

「あの、カイルさん」
「なんだい？」
「これを」
飛鳥はある杖をカイルに渡した。
「これは？」
「これは稲妻の杖です。振りかざすと杖から稲妻が出せます」
「へえ」
「魔物に襲われてもいいように、持っていてください」
「けど…」
「私にはこれがあります」
飛鳥は手袋を見せた。
「それは？」
「これは魔法の手袋。魔法力が編みこまれています。父から受け継いだものです。これを手にはめていると、魔法力がかなり持続するんです」
「へえ、すごい手袋だね」
「そういえば飛鳥、君はどんな魔術が使えるんだい？」
「私の力は風です。かまいたちのように敵を切り裂きます。暗黒竜に通用するかどうかは分かりませんが…。あとは武器に力を与える魔術。あと、少しくらいの傷なら治癒することもできます」
「さすが、伝説の剣士シンと共に戦った人の娘さんだね」
「いえ…まだまだ修行の身です。もっとすごい人がまだ生きていたらよかったのですが…」
「いや、そんなことないさ。君だって…」
その時
”ドーン！”
突然、空から黒い竜が舞い降りてきた。
「！？」
三人は驚いた。
「ま、まさか！？暗黒竜！？」

その黒い竜は全長5メートルほどもあった。
「くっ！」
レイは剣を構えた。盾も構えた。
「レイ！」
飛鳥はレイの持っている剣に魔術を施した。
”ピカッ”
剣がうっすら光り、威力が増したようだった。
「がああああ！」
黒い竜は尻尾で攻撃してきた。
「くっ！」
レイは素早く避けた。
「レイ！」
カイルが心配そうに見ている。
”ブワア！”
黒い竜は炎をはいてきた。
「くっ！」
レイは盾で防いだ。表面をコーティングしてあるだけとはいえ、ネオハルコンの盾は炎を完全に遮った。さすがである。
「はあ！」
飛鳥が魔術を放った。
”ズバア！”
かまいたちは黒い竜のわき腹あたりを切り裂いた。
「ぐわあああ」
もだえる黒い竜。
「うおおお！」
そしてレイはおもいきりジャンプし、黒い竜の胸元めがけてネオハルコンの剣を振り下ろした。
”ズッバアア！”
「ぎゃあああ！」
”ドドーン！”

黒い竜は大地を揺るがしながら倒れこんだ。
「や、やった！」
カイルが言った。
「はあはあ…暗黒竜を…倒した…のか…？」
レイが言った。しかし
「ぐふふ…バカなことを…わたしごときが暗黒竜様なわけがなかろう…」
「なに！？」
「行くがいい…あの城で暗黒竜様は待っておられる…。行って…殺されるがいいわ…」
「…」
しかしレイもなんとなく違うような気はしていた。
「ぐ…ぐふ…」
黒い竜は息絶えた。
「なんだ…違うのか…やけにあっさりしすぎだと思ったけどよ…」
カイルが残念そうに言った。
「…」
飛鳥は黙っていた。
「まあでも今のレイの腕前とその最強の剣があれば、きっと暗黒竜も倒せるさ」
「でも…いや…そうですね」
レイは内心、思っていた。暗黒竜はこんなやつと比べ物にならいないほど強いに違いないと。しかし、レイはもう弱気にはならないと心に誓っていた。母のため、グレンドのため、世界のため、レイは今こそ自分の使命に命をかける決意があった。人は成長するのだ。
「行きましょうレイ」
「ああ」
「気をつけてな。待ってるぜ」
レイと飛鳥は歩き出した。
一歩。また一歩。暗黒竜がいる不気味な城に近づく二人。そして

入り口のドアが見えてきた。そばには何者かが立っている。
「…」
二人はただただ前進した。そして
「これはこれは…よくおいでくださいました」
「…」
魔物が話しかけてきた。魔物はローブをまとっていた。
「伝説の剣士シンの血筋の者レイ。それにかわいらしいお嬢さん」
「…」
「私はウィザルといいます。お見知りおきを」
「門番か？」
「まあ、そんな所でございます」
「ではお前を倒して、先に進ませてもらう」
レイは剣を構えた。
「待って、レイ」
「？」
飛鳥がレイを止めた。
「ウィザル…私は魔術師の飛鳥」
「飛鳥…よい名前ですね」
「あなたは魔術師ね。魔法力があふれ出てるわ」
「いかにも」
「それに…私と同じ風の力を持っている」
「ほう…それは奇遇ですね」
「どうウィザル？魔術師どうし、私とサシで勝負しましょう」
「！？」
レイは驚いた。
「ほほう…面白い。なかなか根性のあるお嬢さんだ」
「飛鳥！？」
「レイ、ここは私に任せて」
飛鳥は少しでもレイに傷を負わせまいと考えていた。
「いいでしょう。なかなか面白いゲームです。受けてたちましょう」

魔物は構えた。不気味な杖を持っていた。
「飛鳥…！」
「レイ、さがって見てて。私だって伊達に魔術師をやっているわけではないのよ」
「…分かった。気をつけて」
「ええ」
飛鳥とウィザルの戦いが始まった。
「はあ！」
ウィザルはかまいたちを放った。
「えい！」
飛鳥は風の壁を作り、相殺した。
「ふふふ、ならばこれでどうです！」
ウィザルはかまいたちを４つ放ってきた。
「はあ！」
飛鳥も同じく４つ放った。そしてすべて相殺した。
「やりますね」
「…」
レイはじっと見ていた。
「しかし残念なことに私は風以外にも力があるのですよ」
「！？」
そういうとウィザルは大きな水のかたまりを作り出した。
「ふふふ…そりゃ！」
そしてその水のかたまりを飛鳥めがけて投げてきた。
「くっ！」
飛鳥はその水のかたまりにかまいたちをぶつけた。
”ビシャア！”
水のかたまりは一瞬はじけたが、またすぐに元に戻り、飛鳥に向かっていった。
「ほほほ、水を切り裂くことなど、不可能ですよ」
「うっ！」

飛鳥は水のかたまりに包まれた。
「！？」
飛鳥は息が出来なかった。
「ほっほっほ、たわいもない。そのまま窒息してしまいなさい」
「飛鳥！」
レイは飛鳥を助けようとした。しかし
「…！」
飛鳥はレイを見て、目で訴えかけていた。自分自身でなんとかすると。
「飛鳥！」
レイは心配そうに飛鳥を見ていた。
「さあ、どうしますか？飛鳥とやら。ほっほっほ！」
ウィザルは高飛車に笑っていた。
「…」
飛鳥は苦しそうだったが、目を見開き、両こぶしを握り、何かをしていた。
「くそ…」
レイは戸惑っていた。しかし
「ん？」
遠くから気配を感じる。
「あれは？」
見ると、とてつもなく巨大なハリケーンがこちらにやってきた。
「なんだと！？」
ウィザルは驚いた。
ハリケーンはウィザルに向かっていった。
「くっ！」
水のかたまりをハリケーンに放つウィザル。しかし
”ピシャア！”
水のかたまりはいとも簡単にはじけ消えた。
「うおおお！」

ウィザルはハリケーンに巻き込まれ、空高く舞い上がった。
”パアン！”
すると、飛鳥を包んでいた水のかたまりがはじけとんだ。
「やあああ！」
そして飛鳥は宙に舞うウィザルに渾身のかまいたちを放った。
”ズバア！”
「ぐわあああ！」
かまいたちはウィザルを切り裂いた。
”ドサッ”
ウィザルは地面に落ちてきた。
「はあはあ…」
飛鳥も両手を地面についた。
「飛鳥！」
飛鳥に駆け寄るレイ。
「レイ…やったわ…」
「ああ！そうだよ！君の勝ちだ、飛鳥！」
レイは飛鳥を抱きしめた。
「ぐぐぐ…」
ウィザルは最後の力を振り絞り、しゃべった。
「くそう…。し、しかし…その女も…もう魔法力は使い果たしたはず…」
ウィザルの断末魔だ。
「ふふふ…レイよ…いけ。そして地獄を味わうがいい。あ…暗黒竜様！バ、バンザーイ！」
ウィザルは息絶えた。
「…」
レイはしばらく飛鳥を抱きしめていた。
「レイ…悔しいけど…あいつの言うとおり…私は魔法力を使い果たしてしまったわ」
「飛鳥…」

「ごめんね…」
「飛鳥、十分だよ。君は十分すぎるほど頑張った。あとは…俺にまかせて！」
「うん…信じてるわ…」
飛鳥は倒れこんだ。レイは飛鳥のことが心配だったが、気持ちをぐっとおさえて、暗黒竜が待つ城の中へと入って言った。
最後の戦いが…ついに始まる！

つづく☆

（後書き）

その5まであります
よろしくお願いいたします☆

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2642o/

ドラゴン・バスタード　その４

2010年10月11日19時25分発行